

洋画の「ゆくえ」を追う

——「新たな時代のエトランゼ」展を通して——

清水友美

1 ある一つの展覧会から

2020年、「白馬のゆくえ 小林萬吾と日本洋画50年」と題された展覧会が開催された。黒田清輝とともに、近代洋画の礎を築いた小林萬吾¹⁾の生誕150年を祝したこの展覧会は、出身地の香川県立ミュージアムを皮切りに、久留米市美術館・高梁市成羽美術館を巡回。残念ながら、筆者は実見が叶わなかったものの、白馬会誕生とその展開を追える充実した内容であったことが、展覧会図録からうかがい知れた。

とりわけ筆者が関心を寄せたのは、最終章「同舟舎から次世代へ」であった。長きにわたって東京美術学校（以下、美校）西洋画科教授を務めた小林は、その一方で「同舟舎」と称する画塾を東京・赤坂に開き、美校受験を目指す画学生のために石膏デッサンの指導にあたっていた。麻生三郎や牛島憲之など、昭和を代表する洋画家を輩出したこの画塾であるが、そこに野見山暁治²⁾も顔を並べていることに、筆者は驚きを隠せなかった。

年齢とともにダイナミズムを増す野見山作品のルーツは、同舟舎時代のエピソードにさかのぼることができよう。嘉穂中学校の美術部で鳥海竜海から絵画を学んだ野見山は、美校入学を目指し上京。同舟舎では嘲笑的であったと言うが、入学試験直前のコンクールで、石膏の重さを表現した唯一のデッサンと小林に言わしめ、晴れて美校入学を果たす³⁾。入学後は、キュビズムやフォーヴィズムに傾倒したほか、母校・東京藝術大学の教授となった際には、入学試験の石膏デッサンを廃止に踏み切るなど、アカデミズムとは正反対の方向に進んだかのように見えるが、彼が明治期に始まるアカデミズムの

最後の享受者である点は首肯できよう⁴⁾。

この「白馬のゆくえ」展から、洋画の「ゆくえ」とは何かを考えていた矢先に、小杉放菴記念日光美術館で担当した展覧会こそ、「新たな時代のエトランゼーパリへ渡った日本人画家たち 1950-70s —」(図1)であった。

2 新たな時代のエトランゼたち

近代以降、フランスが日本洋画の発展に計り知れない影響をもたらしたことは、これまで開催されてきた数多くの展覧会が物語っている⁵⁾。しかしながら、第二次世界大戦という「断絶」の時代を経た後に渡仏した日本人画家を紹介する機会は、実に少なかったと言えるだろう。「新たな時代のエトランゼ」と題した本展は、1950年代から70年代にかけてパリへ渡った野見山、赤堀 尚⁶⁾、笠井誠一⁷⁾、植田寛治⁸⁾、進藤 蕃⁹⁾、入江 観¹⁰⁾、小杉小二郎¹¹⁾の作品を紹介した展覧会だ。何故、この20年という短期間かつ、先に挙げた7人の画家を取り上げたのか。それは、抽象絵画が世界を席卷する中で、「具象絵画」を貫き、かつ渡航に制限があった時代に、「本場で絵を学びたい」というただ一つの思いで、パリを渡った画家であるためだ。

2-1 ボザールで学んだ画家たち

そもそも、本展開催の機縁は日光市出身の入江 観にある。青空の下に広がる風景を描くことから、「蒼天の画家」と称される入江は、東京藝術大学卒業後、1962年にフランス政府給費留学生として渡仏、パリ国立美術学校（通称：エコール・デ・ボザール、以下ボザール）でモーリス・ブリアンション¹²⁾に師事した。本展で注目すべきは、入江を含めた3人もの日本人留学生が、ブリアンションの下で学んだ点だ。入江と笠井誠一によれば、師の教えは「コンポジション（構成）」と「色彩の使い方」の2点に集約される。当時、同年代の画家たちが抽象絵画に向かう中、具象に取り組んでいた入江は、日本で方向性に自信を持てずにいた。しかし、師の教えを通して、具象・抽象を問わず、絵画はコンポジションの上に成立している点を知り、具象へ進む

決心がついたと振り返る¹³⁾。渡仏前の作品（図2）と比較すると、荒々しい筆致は和らぎ、色の面を構成することで、形の表出に努めている（図3）。

一方の「色彩の使い方」は、笠井と進藤 蕃の作品に、その教えが明確に表れていると言えるだろう。渡仏前は暗褐色を用いていた笠井であったが、これまで得意としなかった赤とその補色関係にある青を対比させ、対象の表現を試みている（図4）。対象を縁取る黒く太い線は、パリの教会で目にしたステンドグラスやルーヴル美術館で目にした《アヴィニョンのピエタ》（1455-56年頃作）から着想を得たもので、帰国後、「平面的」な静物画を追求する上での大きなカギとなる（図5）。また、藝大時代は、凹凸感のあるマチエールが特徴的であった進藤の作品（図6）は、「余計な味つけはやめる」「最短距離で描く」という師の教えを受けて、グレーを基調にした、伸びやかな画風へと大きく変化する¹⁴⁾（図7）。

ほかに、ボザールで学んだ日本人留学生としては、植田寛治が挙げられる。入江と笠井の同級生である植田は、1959年に渡仏し、ジャン・スーヴェルビー教室に在籍。残念ながら、第一次滞仏の作品の多くはその行方が明らかでない。帰国後は、個展のほか、新樹会展や主体美術協会展に出品を重ねた彼は、36歳で再びパリの地を踏み、その後、断続的ではあるが約12年の歳月をパリで過ごした。6年ぶりに訪れたパリでは、彼を魅了した「光」が見えなかったものの、「一から納得し直す仕事」¹⁵⁾として、アトリエを構えたパリの屋根裏部屋から望む街並みを描き続けた（図8）。

2-2 私塾などで学んだ画家たち

次に紹介するのは、グランド・ショミエールなどの私塾や、独自で方法で学んだ野見山暁治・赤堀 尚・小杉小二郎だ。フランスでは絵画の基本は共通しており、私塾とボザールの指導方法に違いはなかったと、笠井と赤堀は述懐している¹⁶⁾。

1952年にフランス政府私費留学生として渡仏した野見山は、初めの年はグランド・ショミエールに通い、2年目以降は、サロン・ドートンヌ会員に推挙されるなど、画家としての地歩を固めつつあった。1956年に妻・陽子を亡くす悲劇に見舞われるが、翌年にライ・レ・ローズへ転居したことを機に、

画業は大きく発展する。第2回安井賞受賞作《岩上の人》(1958年、東京国立近代美術館蔵)は、モチーフを極限まで解体してはいるが、裸婦の量感がしっかりと表されており、ここから小林萬吾に激賞されたデッサンの力が見て取れよう。

赤堀は、彫刻を学ぶ妻とともに32歳で渡仏。1959年8月に神戸を出航し、約1ヶ月かけて、経由地であるイタリア・ジェノヴァへ向かった。ジェノヴァから夜行列車でパリへ向かう途中、ブルゴーニュ地方・マコンの風景を目にしたとき、まるで天啓を受けたかのように「油絵をゼロからやり直さなければならない」と悟ったと彼は振り返る¹⁷⁾。笠井が「求道的な仕事」と追想するように、《二ツノビン》(図9)からは、身近なモノを題材に「色彩」と「フォルム」を追求する赤堀の姿勢が垣間見えよう¹⁸⁾。先述したとおり、具象か抽象どちらに進むかは、当時の青年画家たちにとっての共通の迷いであつたと言える。赤堀を具象へ進む運命に決定づけたのが、アメリカ横断だ。アメリカで抽象絵画に間近で触れた彼は、自分の命がある限りは、具象を追求すると決心したのだ¹⁹⁾。

そして、40歳で赤堀は再びパリの地を踏む。第一次滞仏は、対象に肉薄した視点が特徴的であつたが、第二次滞仏では《赤のテーブル》(図10)に代表されるように、色彩がより鮮やかに、対象を捉える視点がより広がったことで、画面がより整理されたと言える。

本展で最後に紹介した小杉小二郎は、滞仏期間が最も長い画家だ。わずか1年あまりでフランス生活を切り上げた祖父・小杉放菴に対し、彼の滞仏期間は約30年に及んだ。26歳で中川一政に随って初渡仏を果たすも、中川の妻の急病により、わずか数ヶ月で終わる。滞仏経験のある岡鹿之助の助言を受け、単身で再びパリの地を踏んだのであつた。パリでは、グランド・シヨミエールに通うが、在仏日本人画家・岩田榮吉(1929-1982)との出会いが、小杉の画風に大きな発展をもたらす。フェルメールなどをもとに独自の方法で静物画を追求した岩田は、トロンプ＝ルイユ(だまし絵)の名手として知られている。岩田の古典に基づく的確な指導により、小杉の作品は立体感が生まれてゆく。渡仏当初の作品と比較すると、その違いは明らかだろう(図11・図12)。

3 さらに「ゆくえ」を追う

本稿では、本展出品作家のパリ時代を中心に紹介したが、展覧会場では、それぞれの画家の滞仏前の作品・滞仏作・帰国後の作品を展示し、パリでの学びが画業にもたらした影響について探った。

本展で得た気づきは2つある。まず1つは、彼らが師事した日本人洋画家の多くが渡仏経験を有している点だ。例えば、笠井誠一が東京藝術大学で師事した伊藤 廉は、昭和初頭に約3年間滞仏。セザンヌ論にも精通していた師の存在は、笠井の渡仏を後押しした。また、赤堀 尚の藝大時代の師である林 武も同様に、渡仏経験を有する。彼らは一定のキャリアを積んだ後に渡仏した点においては、本展出品作家とやや異なるものの、昭和洋画とパリについて再考する上で、重要な要素になると筆者は考えている。

もう1つは、彼らが官展に由来する日展ではなく、美術団体による公募展、同志によるグループ展、個展を活動の拠点としている点だ。入江は芸大在学中から、小杉放菴を中心に1922年に結成された美術団体・春陽会を活動の拠点としているが、無所属のイメージが強い野見山が、1942年に同展に初入選を果たしている点も実に興味深い。官展の力がまだ強かった当時、春陽会展に出品することは、非常に珍しいケースであったという。

一方の赤堀と笠井は、1985年から「立軌会」に同人として参加している。かつて官展を発表の拠点とした牛島憲之らを中心に、1949年に結成されたこのグループ展は、公募制・授賞制ではなく、「同人制」を掲げている点が大きな特徴だ。「団体展・公募展不要論」が唱えられるようになり久しいものの、これらが美術界に新たな風を吹き込み、さらに画家たちにとって研鑽の場として重要な役割を果たしている点については、笠井と入江が述べているとおりだろう²⁰⁾。

野見山が受賞し、多くの出品作家が受賞候補となった具象絵画の登竜門的存在・安井賞が1997年に終焉を迎えたことに象徴されるように、抽象・具象、さらには日本画・洋画の境界線が曖昧なものになりつつある。本展が現代洋画と具象絵画を捉え直す機会となることを願い、そして本展を通じて得た気

づきを足がかりに、洋画のさらなる「ゆくえ」を追ってゆきたい。

付記

本稿は、拙稿「憧憬から現実へー日本人画家がパリで得たものー」（『新たな時代のエトランゼーパリへ渡った日本人画家たち 1950-70sー』小杉放菴記念日光美術館、2023年、4-9頁）と「解説 新たな時代のエトランゼ展 7人の画家 熱量と喜び」（『下野新聞』2023年10月7日、13頁）をもとに、本論集のために再構成し、書き下ろしたものである。また、「新たな時代のエトランゼ」展の関連イベントとして、2023年10月14日に赤堀 尚・笠井誠一・入江 観・小杉小二郎氏による「出品作家によるクロストーク」が開催され、その講演会録は2024年3月に刊行予定である。本稿を為すにあたって、赤堀 尚先生・笠井誠一先生・入江 観先生・小杉小二郎先生・植田多帆様・三本松うり様のご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます。

注

- 1) 小林萬吾（1870-1947）現在の香川県三豊市に生まれる。16歳頃に原田直次郎と安藤伸太郎から、絵画の手ほどきを受ける。内国勸業博覧会を機に、黒田清輝と出会い、天真道場に入門。1896年、東京美術学校西洋画科新設と同時に同科選科入学。また、同年に創立された白馬会の会員となり、以降同会展に出品を重ねる。1898年、同校卒業後は、助手・助教授・教授を務めた。1911年から3年間、文部省の命で渡欧。白馬会解散後は、光風会会員となる。文部省美術展覧会・帝国美術院展覧会など官展にも出品したほか、審査員を務めた。1941年、帝国美術院会員となる。
- 2) 野見山曉治（1920-2023）現在の福岡県飯塚市に生まれる。1938年、東京美術学校油画科予科入学。同校本科では、南 薫造教室に入る。1943年、第二次世界大戦のため、同校を繰り上げ卒業。現役兵として、満州に派兵される。1952年、フランス私費留学生として渡仏。グランド・ショミエールに学ぶ。1956年、サロン・ドートンヌ会員に推挙される。1958年、『岩上の人』で第2回安井賞を受賞。1964年、帰国。1968年、東京藝術大学助教授（のちに教授）となる。2000年、文化功労者に選出。2003年、東京国立近代美術館・大分市美術館・富山県近代美術館・愛知県美術館で「野見山曉治展」が開催される。2014年、文化勲章を受章。文筆にも優れた才能を有し、多くのエッセイを上梓したほか、戦没画学生慰霊美術館「無言館」の設立にも携わった。
- 3) 野見山曉治「小林萬吾先生」『白馬のゆくえ 小林萬吾と日本洋画50年』（香川県立ミュージアム・久留米市美術館・高梁市成羽美術館、2020年）、14-15頁
- 4) 中村節子氏も同様のことを指摘している。中村「自然の本質を突きつめる一野

見山暁治の絵画世界』『野見山暁治展』（石橋美術館・ブリヂストン美術館、2011年）、6頁

- 5) 日本とフランスの洋画をテーマとした展覧会として、次が代表的な存在として挙げられる。『パリへー洋画家たち百年の夢 黒田清輝、藤島武二、藤田嗣治から現代まで』東京藝術大学大学美術館・新潟県立近代美術館・MOA美術館、2007年；『特別展 住友グループの企業文化力Ⅱ ちょっとパリまで、ず〜っとパリで 渡欧日本人画家たちの一品』泉屋博古館分館・泉屋博古館、2014年；『CONNECTIONS 海を越える憧れ、日本とフランスの150年』ポーラ美術館、2020年
- 6) 赤堀 尚（1927-）現在の静岡県沼津市に生まれる。1947年、静岡第一師範学校卒業後、新制中学の教員となるも、本格的に絵画を学ぶため、翌年退職。1950年、東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻入学。梅原龍三郎と林 武の指導を受ける。1954年、同大学卒業、同大学専攻科に進む。1956年、同大学専攻科修了。1959年、彫刻を学ぶ妻とともに渡仏。滞仏中、グランド・ショミエールに通うほか、サン・プラシード画廊で個展を開催。1962年、帰国。1967年から2年間、再びフランスに滞在する。1985年、笠井誠一とともに立軌会に同人として参加。2013年、「画業65年記念 赤堀 尚展 赤の軌跡」が佐野美術館で開催される。現在、立軌会同人。
- 7) 笠井誠一（1932-）現在の北海道札幌市に生まれる。1953年、東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻入学。伊藤 廉の指導を受ける。1957年、同大学卒業、同大学専攻科に進む。1959年、同大学専攻科修了。同年、フランス政府給費留学生として渡仏、パリ国立美術学校入学。モーリス・ブリアンションの指導を受ける。滞仏中、サロン・ドートンヌなどに出品し、サン・プラシード画廊で個展開催。1966年、帰国。1967年、愛知県立芸術大学講師（のちに助教授・教授）となる。1985年、赤堀 尚と立軌会に同人として参加。2001年、『二つの卓上静物』で第24回安田火災東郷青児美術館大賞を受賞。2018年、練馬区立美術館で「笠井誠一展一形の世界」が開催される。現在、立軌会同人・愛知県立芸術大学名誉教授。
- 8) 植田寛治（1934-2020）現在の東京都大田区に生まれる。1953年、麻布高等学校卒業。この頃、独立美術協会に属した高島達四郎と志村計介に師事。1957年、東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。在学中、加山四郎の指導を受ける。1959年、渡仏。パリ国立美術学校に入学、ジャン・スーヴェルビーの指導を受ける。1963年、帰国。帰国後は、主体美術協会展に出品を重ねる。1970年以降も断続的に渡仏し、生涯の滞仏期間は計15年に及んだ。
- 9) 進藤 蕃（1932-1998）現在の東京都世田谷区に生まれる。1952年、東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻入学。小磯良平の指導を受ける。1956年、同大学

卒業、同大学専攻科に進む。1958年、同大学専攻科修了。1960年、フランス政府給費留学生として渡仏、パリ国立美術学校入学。モーリス・ブリアンションの指導を受ける。滞仏中は、サロン・デ・ザンデパンダン展などに出品。1962年、帰国。帰国後は、笠井誠一らと結成したグループ展「和の会」などのほか、個展を発表の拠点とした。没後の2002年、『進藤 蕃 全作品集』が求龍堂から出版される。

- 10) 入江 観 (1935-) 現在の栃木県日光市に生まれる。1953年、東京藝術大学美術学部芸術学科入学。在学中、加山四郎と山本豊市の指導を受ける。1956年、第33回春陽会展に初入選して以降、現在まで同会展を発表の拠点とする。春陽会研究所では、岡鹿之助・三雲祥之助・加山四郎らの指導を受ける。1957年、同大学卒業。1962年、フランス政府給費留学生として渡仏、パリ国立美術学校入学。モーリス・ブリアンションの指導を受ける。1964年に帰国し、春陽会会員に推挙される。1967年、女子美術短期大学専任講師（のちに助教授・教授）となる。1996年、『海辺の丘』で、第14回宮本三郎記念賞を受賞。2004年、小杉放菴記念日光美術館と茅ヶ崎市美術館で「蒼天の画家 入江 観の世界展」、2017年、小杉放菴記念日光美術館で「開館20周年記念 入江 観 故郷一日光を描く」、2022年、茅ヶ崎市美術館で「湘南を描く 入江 観展」が開催される。現在、春陽会会員・女子美術大学名誉教授・日本美術家連盟常任理事・日本中国文化交流協会副会長。
- 11) 小杉小二郎 (1944-) 現在の東京都北区に生まれる。父・一雄は美術史学者で、早稲田大学教授を務めた。祖父・放菴は画家。高校時代に、工業デザイナーである叔父・小杉二郎のもとを訪ね、工業デザインの道へ進む決意をする。1962年、日本大学芸術学部工業デザイン科入学。1966年、同大学卒業。工業デザイナーとして就職するも、中川一政の薫陶を受け、画家を志す。1970年、中川一政に随って渡仏。一時帰国ののち、同年単身渡仏を果たし、グランド・ショミエールに通う。1972年、岩田榮吉の知遇を得て、1982年に岩田が没するまで親しく交流する。滞仏中はサロン・デ・ザンデパンダンなどに出品を重ねる。1984年、第1回日本青年画家展で優秀賞受賞。1989年、前田寛治大賞展で佳作賞受賞。2006年、『月・追憶』で第29回損保ジャパン東郷青児美術館大賞を受賞。同年、小杉放菴記念日光美術館で「小杉小二郎―巴里／日光 ふりむけば放菴」、2016年、同館で「小杉小二郎―窓辺物語」が開催される。
- 12) モーリス・ブリアンション (Maurice Brianchon, 1899-1979) フランスのフレネー＝シュル＝サルトに生まれる。1920年、サロン・ドートヌス会員に推挙される。1922年、パリ装飾美術学校卒業。1944年、パリ装飾美術学校・パリ国立美術学校教授となる。シャイヨ宮やオペラ座の装飾を手がける。1973年、吉井画廊新館で「モーリス・ブリアンションとその時代」展が開催され、自作とと

もに、パリ国立美術学校で指導した笠井誠一と入江観の作品が展示された。

- 13) 入江 観「思い出の画帖から⑫ プリアンションとボーザール」『繪』307号(1989年6月)、日動画廊、26頁
- 14) 進藤 蕃・江口 週「貧しくも楽しかった学生時代。そして、それぞれの道へ」『月刊美術』182号(1990年9月)、112頁
- 15) 植田寛治「私の光とオーヴェル」『繪』205号(1981年3月)、日動画廊、38頁
- 16) 赤堀 尚・笠井誠一「作家にきくニッポンの油絵」『美術の窓』374号(2013年3月)、39頁
- 17) 窪田元彦「青春プレイバック 赤堀 尚」『新美術新聞』1199号(2009年11月1日)、5頁
- 18) 笠井誠一「赤堀 尚画集の刊行に寄せて」『赤堀 尚画集』赤堀 尚画集刊行会、1996年、190頁
- 19) 前掲注16。また、赤堀 尚先生からお話を伺った。
- 20) 笠井誠一「団体展雑感」『アートビジョン』第25巻1号(1997年7月)、10頁；
入江 観「私にとっての団体展」『アートビジョン』第25巻1号(1997年7月)、10-11頁

新たな時代の エトランゼ

— パリへ渡った日本人画家たち 1950-70s —

野見山 曉治

NOMIYAMA Gyoji

赤堀 尚

AKAHORI Naoshi

笠井 誠一

KASAI Seichi

植田 寛治

UEDA Kanji

進藤 善

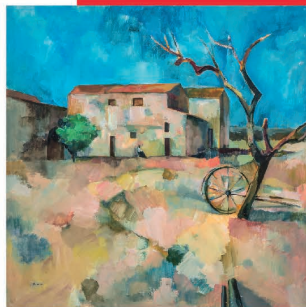
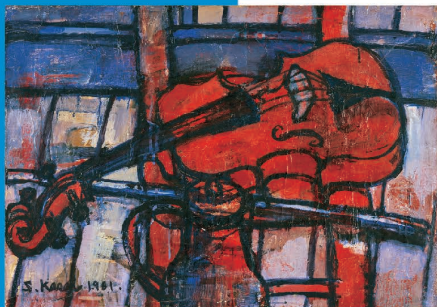
SHINDO Shigeru

入江 観

IRIE Kan

小杉小二郎

KOSUGI Kojiro



Etrangers du nouvel âge

2023.9.16 [土] → 11.19 [日] 開館時間 9:30→17:00 ※入館は閉館30分前まで

■ 休館日：月曜日(9月18日・10月9日は開館)、9月19日(火)、10月10日(火) ■ 入館料：一般730(650)円、大学生510(460)円、高校生以下は無料

※()内は20名以上の団体割引料金 ※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、日光市公共施設使用料免除カードの交付を受けた方とその付き添いの方1名は無料

※第3日曜日「家庭の日」(9月17日、10月15日、11月19日)は、大学生は無料 ※11月3日(金)「文化の日」は、入館無料

主催：公益財団法人 小杉放電記念日光美術館、日光市、日光市教育委員会、下野新聞社

KOSUGI HOAN
MUSEUM OF ART,
NIKKO



小杉放電記念日光美術館

〒321-1431
栃木県日光市山内2388-3
Tel: 0288-50-1200
<https://www.khmoan.jp/>

上野市／佐賀市《ソフィアの集》1959年、個人蔵
上野市／佐賀市《赤坂の朝日》1970年代、個人蔵
下野市／佐賀市《ソフィアの集》1960年、日光美術館蔵
下野市／日光市《朝日と夕陽》1960年、日光市蔵(小杉放電記念日光美術館蔵)

※最新情報は当館ウェブサイト・公式SNS等でご確認ください。

図 1

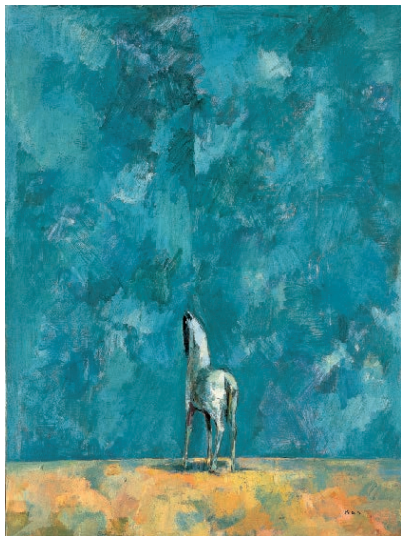


図2 入江 観《白い馬》1960年、個人蔵



図3 入江 観《ブリアンションのアトリエ》1963年、小杉放菴記念日光美術館蔵

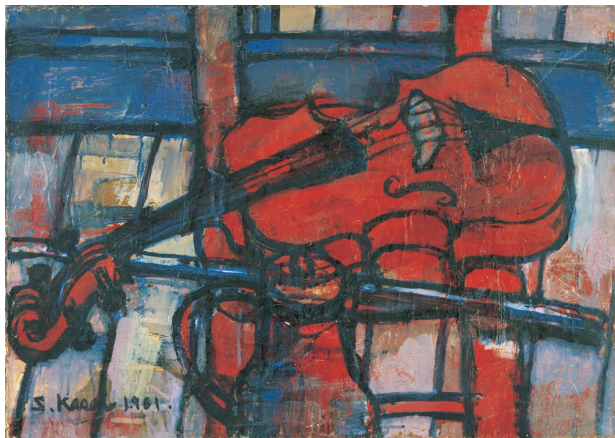


図4 笠井誠一《ヴァイオリンと壺》1960年、名古屋画廊蔵

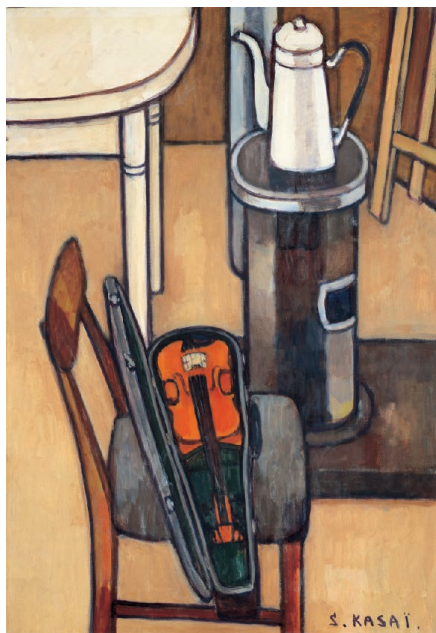


図5 笠井誠一《ストーヴとヴァイオリンのある室内》1976年、個人蔵



図6 進藤 蕃《屠殺場》1956年、個人蔵



図7 進藤 蕃《花と裸婦 (Nu)》1962年、個人蔵



図8 植田寛治《歩道の初秋》1970年代、個人蔵



図9 赤堀 尚《二ツノピン》1960年、個人蔵



図10 赤堀 尚《赤のテーブル》1968年、個人蔵



図11 小杉小二郎《三本の壺》1970年、個人蔵



図12 小杉小二郎《屋根裏のアルルカン》1979年、株式会社フジ・メディア・ホールディングス蔵

【図版提供】

- 図1 小杉放菴記念日光美術館
(デザイン：ヤマゼンコミュニケーションズ株式会社 佐藤真哉)
- 図2・5 株式会社求龍堂
- 図3・6・7・9・11 小杉放菴記念日光美術館 (撮影：乾 剛)
- 図4 名古屋画廊
- 図8 植田多帆氏
- 図10 赤堀 尚氏
- 図12 小杉小二郎氏